創られた被爆者詩人アラキ・ヤスサダ

詩に真実は必要か

Hosea Hirata

1996年の夏、アメリカ詩壇において最も権威があるとされる詩の雑誌、*American Poetry Review* がアラキ・ヤスサダという日本の詩人の特集を組みました。アラキの翻訳者は三人で、トサ・モトキユ、オクラ・キョジン、オジウ・ノリナガ[①]という名が連なっていました。彼らの解説によりますと、アラキ・ヤスサダも翻訳者達も共に広島出身であり、アラキは原爆被爆者であるとのことです。

翻訳者達による前書きによりますと、アラキは1907年に京都で生まれ、1921年に広島に移り、1925年から1928年の間に広島大学[②]で西洋文学を学んだとあります。父の病により、大学は中退し、郵便局に勤めます。1930年にノムラという女性と結婚し。娘二人と息子が一人生まれます。1936年兵役にとられますが、前線には送られず、広島で軍の郵便局員として働きます。1945年八月原爆に被爆し、妻と娘一人を亡くします。もう一人の娘は生き延びましたが、四年後原爆症で死亡。息子は市外におり、被爆を免れます。アラキは1972年にガンのため死亡。詩人としてのアラキは限られた友人の詩のグループ外ではまったく無名でした。1980年にアラキの一人息子が偶然にアラキの十四冊になるノートを発見、その中に、*American Poetry Review*に英訳された詩編が入っていた、ということでした。

新しく発見された被爆者詩人の作品はアメリカの詩壇（最近はインターネットで繋がっている）にセンセーションを巻き起こします。しかし、それと同時に、アラキ・ヤスサダとは一人のアメリカ人の詩人、Kent Johnsonのかなり手

の込んだ捏造であるという噂が広まったのです。現在Johnson氏はアラキ・ヤスサダが創られた詩人であることは認めていますが、本当の作者(仕掛け人）は翻訳者の一人として挙げられているトサ・モトキユ（偽名）であると言っています。しかし、トサ氏は残念ながらもう亡くなっており、死ぬ前に、自分の真のアイデンティティは絶対に明かすことのないようにとの遺言を残していった、というのです。このようにして、所謂ポストモダニズムにおいて言われてきた、「作者の死」または「主体の消去」という観念が現実において実行されたような文学的事件としてアラキ・ヤスサダの詩は私たちの前に提出されているわけです。

それでは、まず、一体どんな詩をアラキは残していったのか見てみましょう。しかし、ここで私たちは一つの根本的な問題にぶつかります。アラキのオリジナルである日本語の詩がどこにあるのか。息子によって発見され、三人の匿名翻訳者によって訳されたと伝えられるアラキの十四冊のノートは本当に存在するのかという問題です。それは私たちが普段「現実」と呼んでいる次元では多分存在しないでしょう。ということは、アラキの詩はオリジナル不在の翻訳文学として始めから現れてきたのだと言えます。また、このような日本文学に関する学術会議において、一体、日本語のオリジナルの無い、英訳文学を「日本文学」と規定することができるかどうかという問題がでてきます。オリジナルが無いことが実証されれば、これは日本文学ではないと単純に結論がでるかもしれません。しかし、ここで問題なのは実証されるかされないかということではないと私は思います。作者が日本人であり、被爆者であり、その作品は日本語で書かれていたという一つの言説の枠組みの中に、アラキ・ヤスサダの文学が現れているという事実をまず認知したいのです。そして、そのKent Johnsonが発した言説が、「偽りか真実か」という単純な二分法で割り切ることができない「文学」と呼ばれる世界に特有な次元において作動しているということを確認してみたいと考えます。

では、まず英訳の詩をご紹介いたします。

1997年にニューヨークのRoof Booksという出版社から出された、*Double Flowering: From the Notebooks of Araki Yasusada* という本の最初に載せられている詩です。

MAD DAUGHTER AND BIG-BANG

December 25, 1945*

Walking in the vegetable patch
late at night, I was startled to find
the severed head of my
mad daughter lying on the ground.

Her eyes were upturned, gazing at me, ecstatic-like...

(From a distance it had appeared
to be a stone, haloed with light,
as if cast there by the Big-Bang.)

What on earth are you doing, I said,
you look ridiculous.

Some boys buried me here,
she said sullenly.

Her dark hair, comet-like, trailed behind...

Squatting, I pulled the
turnip up by the root.

*[In the aftermath of the bombing, many survivors moved into the foothills of the Chugoku mountains surrounding Hiroshima. This was the case with Yasusada and his daughter.]③

さて、この英訳であるとされる詩をオリジナルであるべき日本語に移し替える作業をしなければならないのですが、その逆翻訳の過程に、皮肉にも、私たちはこの英訳文の詩としての強さ、または、美しさを見ることが出来るのです。

まず、タイトルの"Mad Daughter" がオリジナルの日本語で何であったのかを考えます。意味から考えれば、「気の狂った私の娘」とでも言えるでしょうが、これでは詩の題としては長すぎます。「狂った娘」にすると日本語の「娘」という言葉が "daughter" という限定された意味を越えて、「若い女性」という意味合いに変化してしまうことに気がつきます。英語の "Mad Daughter" が持っている、子音の "D" が重なることによって浮かび上がる、倹約されたリズムを保つために、二つの漢字「狂」と「娘」を重ね、「きょうじょう」などと読ませることも考えられますが、そのような日本語は存在しません。このように考えていきますと、英語の "Mad Daughter" がいかに詩的に有効な表現であるかということに気がつきます。日本語では、ある意味で、無理な表現なのです。ここでは一応「狂い娘」と訳しておきます。

次の言葉 "Big-Bang" ですが、これもまたリズム感のいい言葉です。日本語では多分「ピカドン」に置き換えられると思いますが、被爆者の恐怖と混乱の中から自然発生してきたきたこの言葉の「歴史的固有名詞性」と呼んでもいいようなものは "Big-Bang" には感じられません。また、被爆の年のクリスマスの日に書かれたことを考えますと、"Big-Bang"のオリジナルの意味である、宇宙生成論、"the Big-bang theory" に私たちのイマジネーションは導かれます。それで

は、アラキは「ピカドン」などという素朴な固有名詞を使わず、「ビッグバン」と日本語で記したのではないかとも思われますが、"the Big-bang theory" がイギリスの宇宙学者 Fred Hoyleによって唱えられたのは、1950年のことですから、これも無理であることになります。明らかなのは、オリジナルであろう「ピカドン」よりも英訳であろう "Big-Bang" の方が、詩的な意味の広がりが深いのです。

無理であろうとも、逆翻訳を続けましょう。

狂い娘とピカドン

昭和二十年十二月二十五日

夜遅く野菜畑を歩いていると、
私の狂った娘の首が
切られ、土の上に転がっている。

その目は上を向き私を見つめ、恍惚として．．．

（遠くからは、それは石に見えた。後光に囲まれ、
まるでピカドンにそこまで吹き飛ばされたように。）

そこでおまえ何してんだ、と私は話しかける。
おかしな格好して。

男の子たちが来て埋めていったのよ、
と不機嫌そうに答える娘。

黒髪が彗星のように後ろに流れている。

私はしゃがんで
かぶを一つ
根こそぎ引き抜いた。

このように翻訳をしていくと、英文では宇宙の始まりである Big-bang と原爆とがイメージ的に重なり合っているのに気づきます。ビッグ・バンによりここまで飛ばされてきた石であるとか、彗星の尾をひいているような黒髪であるとかいうイメージ、また英語の慣用句である "What on earth..." に見られる、"earth" という言葉などが宇宙への広がりを示しているようです。しかし、1945年には誰も"Big-Bang" などという言葉を口にしなかったのです。

またこのように、英訳のテクストを細かく読んでいくと、不自然な個所がいくつも見えてきます。まず、なぜ日本人翻訳者たちが、詩人を名字であろうアラキで呼ばず、ヤスサダと繰り返し言及するのでしょうか。石川啄木のように号で知られている詩人もありますが、戦後詩人ではこういった習慣はほとんどみられません。また、詩人の妻の名はノムラという、名字としかとれない名前で呼ばれています。脚注がアラキのテクストに翻訳者達によって付されていますが、その中には、下記のようなものもあります。

[It would appear likely that this poem refers to the courtship of Yasusada and Nomura.] (25)

この詩はヤスサダとノムラの婚前デートに関するものでしょう、というような意味の文章ですが、名前の呼び方が不自然なことがわかります。

1967年十一月七日付けのノートはフセイという詩人仲間にあてた手紙となっていますが、後記として、Roland Barthes の Empire of Signs という面白そうな本があるけれども、まだ読んでいないと書かれてあります(79)。しかし、この本のフランス語のオリジナルは1970年にならないと発行されていないのです。

三人の日本人翻訳者達によって書かれたとされる、前置きがありますが、こ

ういうことも書かれてあります。

> In addition, the notebooks are interleaved with hundreds of insertions, including drawings, received correspondence, and carbon copies of the poet's letters. (10)
>
> （それに加え、発見されたノートには絵や、友人からの手紙、また詩人の手紙のカーボンコピーなどが何百枚とはさまれていました。）

しかし、タイプライターを使わない日本で、カーボンコピーなどあったのでしょうか？

こう見てきますと、この事件は無名のアメリカ詩人が自分の名を売るために、被爆者のアイデンティティーを悪用し、日本に無知な、アメリカ詩壇のリーダー達にいっぱい食わせたように見えます。しかし問題はそれほど単純ではありません。Double Flowering の本には付録としてKent Johnsonと彼の友人Javier Alvarez[4]の声明文、またインダヴューが載せられてありますが、その中で、彼らは巧みに、また理論的に、仕掛け人であるトサ・モトキユの立場を弁護しています。まず、ここで一つ指摘しておきたいことは、アラキ・ヤスサダの作者としての虚偽性（fictionality）が分かるように、いくつものヒントが意識的にテクストに埋め込まれているという彼らの主張です。それに気づかなかったアメリカやイギリスの詩のジャーナルの編集者達は、作者の虚構性が暴露されると、激怒し、Kent Johnsonを犯罪者呼ばわりし、出版とりやめが相次いだわけです。

この状況に対して、Kent Johnson は下記のような反論を行います(125-133)。

> 1）モトキユにとって「自己ではない作者」を想像力により作り上げるということは彼の文学創作の過程に欠かせないものであった。作者内の自己性というものを消滅させてしまう行為なのであるから、利己心の追及のために書かれたという批判はなりたたない。

2）偽名を使うのが騙すことになるのであったら、73もの偽名を使ったポルトガルの詩人Fernando Pessoa (1888-1935)の仕事をどう見るのか。また同じように偽名を使って作品を書いたジョージ・エリオットは？キルケゴールは？紀貫之は？[5]

3）モトキユがアラキ・ヤスサダのペルソナを装ったのは、他者の人生を出来うる限り想像するという文学者に本質的な行為であり、精神分析で言う転移であり、ラジカルな感情移入である。

4）作者のauthenicityが実証されなければ、詩は詩として成りたたないのか。

それでは、なぜアラキ・ヤスサダの詩がスキャンダルの始まる前に、これだけの注目を浴び、アメリカ詩壇に受けいられたのかという問題を考えてみたいと思います。まず、いままでに知られている所謂「被爆者文学」とは全く異なった美学を持った詩であることが挙げられます。これは、被爆者詩人の第一人者である峠三吉の詩と比べると明らかでしょう。

八月六日

あの閃光がわすれえようか
瞬時に街頭の三万は消え
圧しつぶされた暗闇の底で
五万の悲鳴は絶え

渦巻くきいろい煙がうすれると
ビルディングは裂け、橋は崩れ
満員電車はそのまま焦げ
涯しない瓦礫と燃えさしの堆積であった広島

やがてボロ切れのような皮膚を垂れた
両手を胸に
くずれた脳漿を踏み
焼け焦げた布をい腰にまとって泣きながら群れ歩いた裸体の行列

石地蔵のように散乱した練兵場の屍体
つながれて筏へ這いより折り重なった河岸の群も
灼けつく日ざしの下でしだいに屍体とかわり
夕空をつく火光の中に
下敷きのまま生きた母や弟の町のあたりも
焼けうつり
兵器廠の床の糞尿のうえに
のがれ横たわった女学生らの
太鼓腹の、片眼つぶれの、半身あかむけの、丸坊主の
誰がたれとも分からぬ一群の上に朝日がさせば
すでに動くものもなく
異臭のよどんだなかで金ダライにとぶ蠅の羽音だけ

三十万の全市をしめた
あの静寂が忘れえようか
あのしずけさの中で
帰らなかった妻や子のしろい眼窩が
俺たちの心魂をたち割って
込めたねがいを
忘れえようか！

広島平和公園内に1963年に設置された詩碑には、次の峠三吉の詩句が刻まれて

います。これは今年の広島原爆式典において、小学生代表により大声で叫ばれた詩です。

ちちをかえせ
ははをかえせ
としよりをかえせ
こどもをかえせ
わたしをかえせ　わたしにつながる
にんげんをかえせ

にんげんの　にんげんのよのあるかぎり
くずれぬへいわを
へいわをかえせ[6]

峠三吉は爆心地から三キロ離れたところで被爆し、国立広島療養所で治療を受けている時、1951年11月、アメリカ大統領トルーマンが、朝鮮戦争においてまた原爆使用を検討しているというニュースを聞き、このような詩を書き始めたのです。二年後の1953年三月に亡くなっています。今年は彼の没後五十年になります。

アラキ・ヤスサダの詩には峠三吉の作品が大声で叫ぶ悲惨な現実感、歴史性といったものが全くと言っていいほど欠けています。そのかわりに私たちが感じるのは、ある一種の洗練された詩の美しさです。モダニズムの美学に磨かれた非現実的な美しさと言ってもいいかもしれません。ヨーロッパのモダニズムの紹介者でもあった、現代詩人、西脇順三郎はある詩論の中で、詩の発展の歴史を三段階に分けています。第一段階においては詩は現実を対象とする。第二段階は超現実詩となり、現実と無関係の表現をすることになる。第三段階では、現実を越えようとする意志が究極まで引き伸ばされ、人間の消滅、そして、詩

の消滅に至ると。[7] この説でいけば、峠三吉の詩は詩の第一段階、アラキ・ヤスサダの詩は、第二段階に属するともいえるでしょう。

私たちが原爆文学を考える時に、よく、次のような疑いの言葉を耳にします。原爆文学の伝えたいことはわかる。しかし、それは一体文学として、フィクションとして価値のあるものなのか、と。川口隆行さんが論文「原爆文学という問題領域―「夏の花」「黒い雨」の正典化、あるいは『原爆文学史』」[8]において、なぜ、井伏鱒二の作品が正典化され、その過程において、原民喜や大田洋子の作品が忘れられていったのかと言う問題を書かれていますが、それはアラキ・ヤスサダと峠三吉の詩の、現代アメリカにおける受け入れ状態の格差に平行した問題であるとも思われます。井伏鱒二の「黒い花」が正典となった過程には、江藤淳の評価が大きく貢献しているのですが、彼は、「黒い雨」は〈二十一年前の広島におこった異常事を語るにあたって、作者が見事にこの平常心をつらぬき通している〉、〈平常心という一点に賭けることによって、はじめてこの異常事の輪郭を見定めた〉、と書いています。また、〈原爆をどんなイデオロギーにも曇らされぬ目で、これほど直視しきった小説を私ははじめて読んだ〉としています。これに対照するように、川口さんは大田洋子を〈怒れる大田洋子〉と呼び、彼女は〈原爆投下国アメリカに対する激しい憎悪を喚起すると同時に、被爆者を差別する非被爆者の視線を徹底的に抉りだす〉と書いています。要するに、政治性の薄められた、芸術作品としての原爆文学「黒い雨」が怒らない〈原爆乙女〉である矢須子のイメージと共に正典化されたと川口さんは論じています。

井伏鱒二が「黒い雨」を書く際、友人の被爆者、重松静馬さんの日記に基づき、小説を構築したことはよく知られています。その重松日記と「黒い雨」を比較し、井伏が認めていた以上に直接引用が多いことを指摘し、「黒い雨」を盗作と呼び批判した、被爆者の歌人豊田清史さんという人がいます。[9] その豊田さんが前書きを書いた原爆歌集の英訳、*Outcry from the Inferno* という本がアメリカで出されています。英訳で下のような歌が載せられています。

Like a demon or ghost
a man runs away
staggering --
with both hands
hung loosely in front of him (Ayako Etsuchi) (153)

これはアラキ・ヤスサダ事件についていち早く優れた論文を書いた、スタンフォード大学のMarjorie Perloff教授が引用しているものですが、彼女もこの短歌にトピックの重さは感じられるが、詩の作品の質というものを考えた時に、別に感心するものではないと述べています[10]。

このように比較し考えていきますと、アラキ・ヤスサダの詩がいままでの原爆詩には見られなかった非戦闘的な芸術作品として、スムーズにアメリカの詩壇に受け入れられたことが分かります。無論この芸術性とは純粋なものではありません。広島に象徴される被害者言説へのノスタルジア、アラキのノートに頻繁に現れる禅、能、連歌、などへの言及に惹かれるアメリカ詩壇のオリエンタリズムの目などによって、この芸術性(reception)は保たれているからです。

しかし、ここで作者の虚構性があらわにされた瞬間、この芸術性がもろくも崩れ落ちるのです。なぜでしょう。もちろんこれはわたしが「被害者言説へのノスタルジア」と名指したものに関連していると思われます。現代芸術がもはや美をその対象としていないことは、よく言われます。美のかわりにその対象、または、主題として出てきているのが、心的外傷、いわゆる、トラウマでしょう。これがアメリカではいわゆるPolitical Correctnessに便乗し、文学のアンソロジーを組む時には、マイノリティーの声（ある意味での〈被害者〉）を入れ込まなければならないという無言の約束が出来ているわけです。いいかえれば、現代アメリカ詩壇は新しい被害者言説を探し続けている、オリジナルなトラウマの場所を探し続けているのだ、と言うことができるかもしれません。また白

人男性(Kent Johnson)に代表される非被害者詩人は被害者詩人をある意味で嫉妬しなければならない状態にいるとも言えるかもしれません。

井伏批判を行った被爆者歌人の豊田清史さんははっきりと言っています。「実際にあの出来事を体験したものでないと結局のところは分からないんだ。「核文学」などと言っても、千九百四十五年八月の体験を下敷きにしないと駄目なんだ」と。[11] 実際に井伏鱒二は被爆者ではなかったのです。彼が広島の事をなるだけ誠実に真実に書こうとすれば、被爆者日記の盗作しか道はなかったのかもしれません。しかし、井伏は一つ間違いを犯しています。作者である自分の名前を消さなかった。それに比べ、アラキ・ヤスサダは今、消された名前として、偽名として、匿名として、その作品を私たちの前に提供しています。

豊田さんの言い分にはもちろんいろいろな反論が可能でしょう。それでは被爆者をあまりにも犯すことの出来ない、神聖なる者にしてしまうのではないか。それでは小説家は皆私小説家になるしかないのか。体験してないものには想像力でその体験に参加する権利、または、義務はないのか、と。

焼きただれた少女の写真を前にして、私は、この圧倒的な悪の前で、一体芸術は可能なのかを考えます。私は峠三吉の詩を思い、そしてアラキ・ヤスサダ

の「狂い娘」を静かに口にします。

［注］

①もちろん名前はローマ字でTosa Motokiyu, Ojiu Norinaga, Okura Kyojinと書かれてある。

②広島大学設立は１９４９年である。

③Araki Yasusada, *Double Flowering: From the Notebooks of Araki Yasusada* (New York: Roof Books, 1997), 11.　本文に挿入されているページ数は全てこの本から。

④この人物が実際に存在するのかも明らかではない。

⑤ジョージ・エリオットと紀貫之はHirataの付け加え。Johnsonはプーシュキンを挙げるが、プーシュキンが偽名を使って作品を書いたかは疑問である。(126)

⑥両詩編ともウエブサイト「詩人峠三吉の詩魂」
http://www.st.rim.or.jp/~ success/tohge_ye.html　より引用。

⑦『西脇順三郎詩論集』思潮社　１９６４年

⑧http://home.hiroshima-u.ac.jp/bngkkn/hlm-society/Kawaguchi1.html

⑨ 豊田清史『「黒い雨」と「重松日記」』参照。

⑩ Marjorie Perloff, "In Search of the Authentic Other: The Poetry of Araki Yasusada" in *Double Flowering,* 148-168.

⑪川口隆行「「原爆文学」という問題領域・再考」
http://home.hiroshima-u.ac.jp/bngkkn/hlm-society/Kawaguchi2.html　参照。

引用図版は広島平和記念資料館編刊『図録：ヒロシマを世界に』(1999年) より（写真著作権：朝日新聞社)。

＊討議要旨

坪井秀人氏は、詩の美しさとモラル上の問題とをどのように考えればよいのか、私自身も考えがまとまらないが、と尋ね、発表者は、確かに考えがまとまらないように作られたテクストである、被爆体験に想像力をもって入り込んでいくことは必要である、ただ自分を被爆者に仕立て上げるのがいいかどうか、そこは結論が出せない、私は、このような行為を完全に罪として否定はできない、罪は原爆にある、と答えた。